

埋文

とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2025.9.30

VOL.

172



加納南9号墳出土品（氷見市加納）
《鉄刀》

刀は、敵を切りつける片刃の武器です。古墳時代の刀はまだ反りがなく、まっすぐな直刀です。写真の鉄刀は、ほぼ完全な形で見つかっており、全長は105cmもあります。古墳に副葬された時には柄に糸が巻かれ、刀身はヒノキの鞘に納められていました。軟鉄製のため実用には向いておらず、儀式に使われたものでしょうか。また、朝鮮半島の造刀方法が用いられていることから、輸入品の可能性があります。

とっておき埋文講座① ●企画展「チャレンジとやまヒストリー 2025」

② ●中山南遺跡と上野遺跡～イミズの高地性集落～

埋文あらかると ●博物館実習

Center Flash ●令和7年度特別展「とやま歴史万博」各時代自慢の技術と文化

古写真発掘！ ●井口遺跡（1） 南砺市井口

富山県埋蔵文化財センター

チャレンジとやまヒストリー 2025

とっておき埋文講座①

はじめに

今年で5年目となる夏休みイベント「チャレンジとやまヒストリー」では、県内の小学生とその保護者を対象として、「ワクワク体験教室」「こども考古学講座」「まいぶん研究室」の3本立てで様々な活動を実施しました。

本事業は、埋蔵文化財に関する様々な体験活動を通して、考古学や文化財への関心を高めることを目的としています。また、子供たちが夏休みに取り組む自由研究の一助になっています。



ワクワク体験教室

県内の小学4～6年生とその保護者を対象として行いました。人気のある刀鍛冶体験や大型まが玉づくり体験を含む全6教室22コースで開催しました。県内全域から延べ1,100組を超えるご応募をいただき、期待の高さを実感するとともに、夏休みの楽しい思い出になってほしいと願いながら準備に取りかかりました。

それでは、各教室の活動内容をご紹介します。

○刀鍛冶の体験をしよう

(ペーパーナイフ)

「鍛冶」とは、鉄を鍛錬して刀や鋏などの製品を作ることです。800℃近くまで熱して赤くなった五寸釘を熱しては叩き、熱しては叩きを繰り返して刀の形に近づけます。そして、作った刀(五寸釘)を一気に水に入れて冷やす「焼き入れ」を行い、強度を高めます。最後に、砥石で刃先を鋭く研ぎ、柄を作って仕上げます。

たくさんの汗を流して作ったペーパーナイフの切れ味を確かめると、達成感で喜びの声を上げる子供がたくさんいました。



○古代の鏡の鑄造を体験しよう

(錫鏡)

「鑄造」とは、溶かした金属を型に流して型と同じ物をつくる技法です。今回つくる鏡の原型は、射水市の上野遺跡から出土した弥生時代の内行花文鏡で、中心に花のような内側に向けた6つの扇が連なった文様があります。

初めに、鑄物砂を押し込んで型を造ります。次に、溶かした錫を型に流し込み、冷やして固まったら、鏡の表面を砥石や耐水ペーパーで磨きます。

ざらざらだった面が少しずつ輝き出すと、子供たちは日光を反射させたり、顔を映してみたりして、大喜びでした。



○縄燃りを体験しよう

(草木染のストラップ)

縄文時代の縄は、樹木の皮や植物の茎などからとった繊維を燃って作られましたが、今回は当センター職員が染色した草木染の糸を使います。

初めに好きな色の糸を選んで燃り、縄を作ります。燃りは慣れるまでは大変でしたが、保護者の皆さんと協力して辛抱強く縄を作りました。次に、縄

を結んでいき、ストラップを作ります。螺旋状のきれいな模様ができ始めると、さらに夢中になって作っていました。



○クルミの垂飾づくりを体験しよう

(クルミのペンダント)

縄文人とほぼ同じ方法でクルミの殻を割ったり、削ったり、穴をあけたりしてペンダントを作ります。

初めに、クルミの殻割りに挑戦しました。叩き石できれいに二つに割ることに苦戦していましたが、徐々にコツを掴んでいった様子でした。次に、砥石で横断面を研ぎました。徐々にきれいな模様が現れ、歓声が上がりました。最後に、できあがったペンダントに漆を塗りました。鮮やかな光沢が出て、すてきなペンダントに仕上がりました。



○染物を体験しよう

(藍染エコバッグ)

藍の色は「ジャパン・ブルー」と呼ばれ、日本を代表する色として世界中にも知られています。

エコバッグにビー玉やクリップ、輪ゴムなどを使って模様付けをします。それを藍液に漬け込んで染色すると、鮮やかな藍色の中に白めきの模様が表れます。思い描いた模様が浮かび上がると、嬉しそうにバッグを見せてくれました。



○大型まが玉づくりを体験しよう (滑石製大型まが玉)

まが玉づくりは当センターの看板体験メニューの一つとして行っていますが、この教室では通常体験で使う石の3倍サイズのものを使います。

使用する石のサイズが大きい分、時間も労力もかかりますが、完成品の迫力に喜びもひとしおです。ぜひ通常体験でのご参加もお待ちしています。



こども考古学講座

講義では、考古学とは何か、またその研究方法、発掘調査や調査後の整理作業、さらに博物館の仕事などについて学びました。

出土品に触れる体験では、遺跡から出土した本物の土器や石器に実際に触りながら、そのつくりや文様、使い方等を学びました。

館内見学では、初めて見る収蔵庫の広さに驚き、そこに保管されている遺物の数の多さに圧倒された様子でした。

活動では、拓本作りと公文書館とのコラボ企画「昔の文字を読み書きしよう」を行いました。和紙に黒く土器の文様が浮かび上がったり、自分の名前



を昔の文字を使って書くことができたりすると、子供たちは嬉しそうでした。

まいぶん研究室

当センターでは、毎年夏休みに来館する小学生やその家族を対象に「まいぶん研究室」を開設しています。今年度も、考古学や埋蔵文化財について関心を高めたり調べたりできるコーナーを設置しました。

○「タッチ・ザ・DOKI」と遺跡地図閲覧コーナー

市町村・校区別の遺跡地図とふれる標本箱「タッチ・ザ・DOKI」を置き、県内各市町村にある遺跡と、そこから出土している土器について自由に調べられるコーナーです。身近にある遺跡から出土した土器に触れることで、考古学への親近感がわくようにしました。



○石臼体験コーナー

ヨモギの葉をすり潰し、もぐさを作る体験コーナーです。体験した子供たちは、重い石を回すと粉状になって落ちてくるヨモギの葉に驚くとともに、ヨモギ特有の香りを楽しんでいました。



○叩き石体験コーナー

縄文人が実際に使用していた石皿の



上のくぼみにドングリをセットして叩き割った後、実を取り出してすり石で粉状にします。ドングリの補給が間に合わないくらい人気のコーナーでした。

○ヒスイの穴あけ体験コーナー

弓を用いた縄文時代の方法で、ヒスイに穴をあける体験コーナーです。子供たちは弓を使って竹錐を回すことに苦戦しながらも一生懸命に硬いヒスイを削っていました。



○縄文土器の接合に挑戦!

2種類の縄文土器の土器パズルを用い、土器の接合を体験してもらうコーナーです。ピースの形はもちろん、文様の特徴をじっくりと観察しながら組み立てていました。



終わりに

今年度も多くの方々にご来館いただき、体験やクイズラリーを楽しんでいただきました。ありがとうございました。参加された皆様の笑顔や「勉強になりました」、「楽しかったです」との温かいお声かけは、励みとなりました。アンケートでも温かいコメントを多数いただき、大変嬉しく思います。

次年度も皆様からのご意見を踏まえ、より一層子供たちに楽しみながら歴史や考古学に親んでもらえるような活動の企画・運営に努めて参ります。たくさんのご参加をお待ちしております。

(宮腰 真央)

中山南遺跡と上野遺跡 —イミズの高地性集落—

とっておき埋文講座②

富山県埋蔵文化財センター 岡本淳一郎

はじめに

当センターでは、本県の歴史や文化を理解する上で重要な出土品を重要考古資料として選定し、これを周知し、保存・活用・未来へ継承するため「富山県の重要考古資料」を刊行してきました。令和7年度は、第17冊として、弥生集落遺跡出土品を選定しました。

選定資料について

選定資料が出土した遺跡は、射水市中山南遺跡・上野遺跡、上市町江上A遺跡、高岡市下老子笹川遺跡の4遺跡です。4遺跡はいずれも弥生時代後期から古墳時代初頭の集落遺跡で、位置は図1のとおりです。図には小さい黒丸がたくさんありますが、同時期の集落遺跡で、いくつかまとまりが認められます。私は、このまとまりのところに、クニがあったと考えています。選定資料の出土した遺跡は、それぞれのクニにおいて拠点の、中心的な役割を果たした集落です。今回の講座では、中山南遺跡と上野遺跡の出土品を通して弥生時代後期から古墳時代初頭の射水地域にあったであろうクニについて考えたいと思います。

中山南遺跡の発掘調査は、昭和38年から43年にかけて行われ、富山県初の大規模調査です。遺跡は、平地との比高差約15mにあり、いわゆる高地性集落です。調査では竪穴住居が9棟、ピット、溝などの遺構が見つかります。竪穴住居には、直径が約10メートルを超えるような大型で、祭祀用土器が多数出土しているものがあり、地域首長が深く関わっていたと考えられます。選定出土品は、弥生土器30点で、北陸東部の土器研究の基準資料として学術上重要であるとともに、地域の歴史を示す重要な資料です。

上野遺跡は、北陸自動車道建設に

伴って15,000㎡を発掘調査され、現在は小杉ICとなっています。遺跡は、平地との比高差約20mの細長い尾根上に立地しており、こちらも高地性集落です。調査では、竪穴住居10棟及び土坑及び溝等が多数確認されています。竪穴住居には、直径約13mの大型のものがあり、内部から仿製の内行花文鏡が1面出土しています。この竪穴住居は、地域の首長が住んでいたのではないかと考えられます。普通サイズの竪穴住居では、管玉を作っています。土坑には直径が2m以上、深いものが何基もあり、貯蔵穴(穴蔵)と考えられます。選定出土品は、弥生土器21点、石製品22点、内行花文鏡1点です。地域の首長がいた集落の出土品で、地域の歴史を説明するにあたって、重要な資料です。

弥生時代後期から古墳時代初頭のイミズのクニを考える

弥生時代後期から古墳時代初頭は、「古墳出現前夜」、「弥生／古墳移行期」ともいわれています。中国の歴史書にみられる、この時期の歴史的な事象としては、国(クニ)や王(オウ)、倭国大乱があります。考古学では、クニについては祭祀、倭国大乱は高地性集落などの集落、オウは首長墓から知ることができます。これらは弥生時代後期から終末期には地域のそれぞれの独自色を持ちましたが、その後、淘汰され、大和政権により齊一化され古墳時代へ

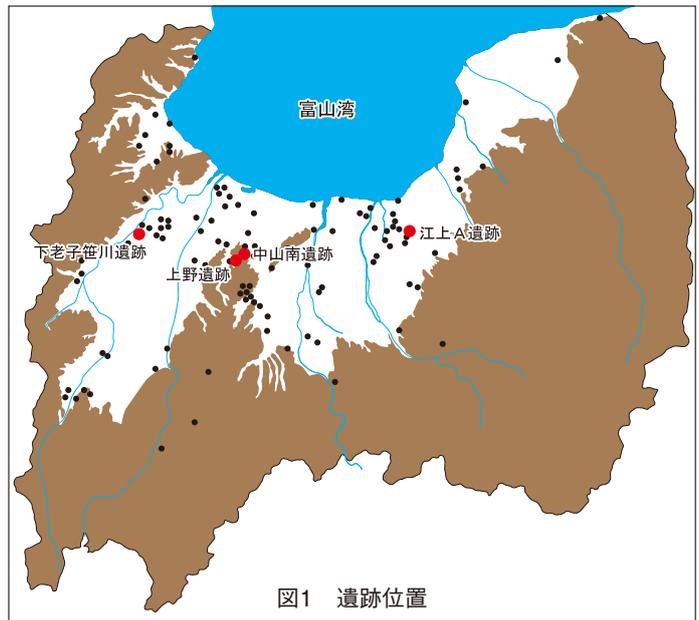


図1 遺跡位置

と移行していきます。

以上のことを踏まえて、射水地域のクニ(以下、「イミズ」とします。)がどのように弥生時代から古墳時代へと移行していったのかを祭祀、集落、墓の面から見ていきます。その前にイミズですが、内部はさらに4地域に分けられます(図2)。射水丘陵西側の串田新遺跡を中心とした地域、上野遺跡が位置する射水丘陵中央の谷から平地の南側中央地域、中山南遺跡が位置する東側の地域、中曽根西遺跡が位置する北側の旧放生津瀧西側地域の4地域です。

イミズの西側の呉羽丘陵以東にも、白鳥城跡、杉谷古墳群、百塚住吉遺跡がありますがこれは隣のクニになると考えられます。このクニをここでは、仮に「ネイ」とします。

祭祀について、北陸は祭祀に使う土器に特徴があるとされています。これには器台と頸の細い壺が一つになった「結合壺」、器台と鉢が一つになった「結合鉢」があります。結合鉢は越前や加賀などの北陸西部を中心に分布し、結合壺は、能登、富山、上越の北陸東部を中心として分布するとされています。このことから、「東の越」と

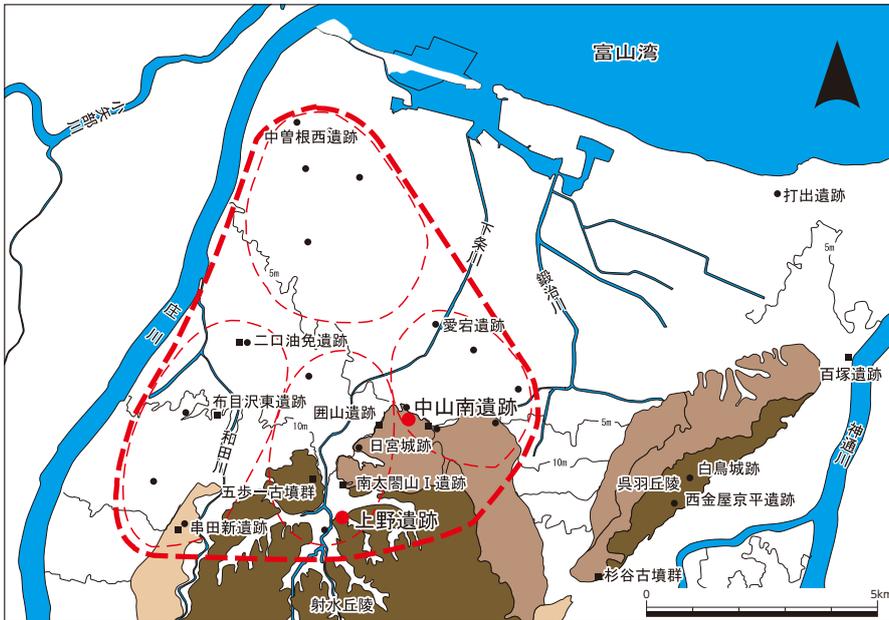


図2 イミズのクニ

「西の越」とし、異なる文化圏とされる場合があります。結合壺は、イミズでは中山南遺跡、上野遺跡、^{めのめざむきた}布目沢北遺跡で、ネイでは富崎遺跡、杉谷A遺跡で出土しています。中山南遺跡の結合壺(写真1)は杉谷A遺跡のものと同様です。結合鉢ですが、イミズでは上野遺跡、^{ふたぐちあひらめん}二口油免遺跡、^{あたご}愛宕遺跡でも出土しています。写真2の上野遺跡の結合鉢は、口縁部が短く、装飾の透かし穴が1段となり、西の越のものと比較すると省略されたような形をしています。また、土器の文様についても地域の特徴がみられます。ネイの百塚住吉遺跡や^{ちよくしづか}勅使塚古墳出土の高坏や壺などの口縁部下部に施文される擬凹線文は、中山南遺跡出土の土器にも見られ、ネイとイミズで共通した文様が見られます。クニとしては、別かもしれませんが、交流があり情報交換をしてい



写真1 中山南遺跡 結合壺

たというか、クニのくくりも緩やかだったのではないかなと思います。

高地性集落は、その位置する標高が平地との比高差が大きくなればなるほど防禦性が強くなるとされています。図3は富山県内の主な高地性集落遺跡の比高差をグラフにしたものです。このなかで、ネイの白鳥城跡は120mと防禦性が極めて高いといえますが、イミズの中山南遺跡や上野遺跡は標高20m未満で防禦性がそれほど高くはありません。中山南遺跡や上野遺跡にみられる大型住居は首長の住居と考えられます。このことから、これら集落は、防禦機能はそれほど高くありませんが、地域の中心的な役割を果たしたものと推察されます。しかし、同時期のイミズには平地にも集落があります。このことからクニ内部では、稲作を行う一般集落と首長がいる拠点集落というふうに役割分担されていたのではないかと考えられます。一方、下老子笹川遺跡が位置するクニは丘陵などの高地が



写真2 上野遺跡 結合鉢

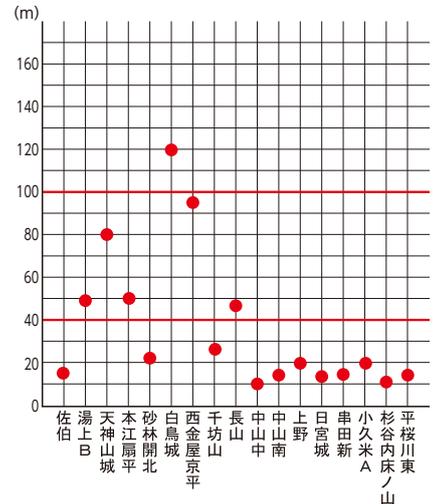


図3 高地性集落の比高差

ありません。クニも、立地場所に応じた役割を果たしていたのかもしれない。

イミズの墳丘墓には、串田新遺跡の第1~3号墓があります。いずれも、直径が20m弱の円形の墳丘墓とされています。このほか^{かこいやま}壘山遺跡第4号方形周溝墓や二口油免遺跡1号墳も規模などから方形の墳丘墓ではないかと考えられます。一方、ネイは富崎3号墓や杉谷4号墳は、^{よすみとつしづつた}四隅突出型墳丘墓です。富山県は、全国的には四隅突出型墳丘墓の分布地域として知られていますが、四隅突出のネイ、円形・方形のイミズというふうに、隣のクニであっても首長により墳丘墓のあり方が異なるのではないかと考えられます。

まとめ

クニの中には同時に、高地性集落もあれば、平地の集落があり、有力者がいるムラもあれば、農耕を中心のムラや、防禦的施設もあり、役割分担をしていたのではないかと考えられます。

祭祀からクニ、墳丘墓からオウの独自性が認められますが、対立するのではなく、緩やかなもので、隣を認め合い、むしろ協力していたのではないかと考えられます。

以上のことから、弥生時代後期から終末期は、戦乱ではなく政治的な緊張が続いた時期で、ゆるやかに古墳時代へと移行したのではないかなと私は考えています。

(令和7年7月6日)

第6回 県民考古学講座)

埋文 あらかると

博物館実習

博物館実習は、学芸員資格の取得を目指す学生に対して行う実地研修です。

当センターでは毎年、博物館に関する人材育成や博物館活動の普及を目的として、地元の大学生を中心に実習生を受け入れています。今年度は7月22日(火)～7月31日(木)のうち8日間、8名の学生を対象として実施しました。

実習内容は、展示の企画及び実践、夏休み親子体験教室の指導、秋から開催する特別展の展示学習教材の作成など、多岐にわたります。

展示の実践では、当センターのホールに設置している、ケース内展示の企画立案をし、さらにパネル・キャプション作成、遺物展示を行いました。

タイトルは「イマドキ大学生なら縄文土器をこう使う」です。今、自分たちが暮らしている部屋に縄文土器を置くとしたらという想定のもと、大きな深鉢は玄関に置いて傘立てに、浅鉢は洗面台として、部屋の中では釣手土器をアロマポットになど様々なアイデアが出ました。展示は、土器の中に実物の傘やアロマキャンドルをいれた大胆なものとなっています。さらにキャプションは、スマートフォンの画面に遺跡名や土器の用途などをSNS風に記載し



て、イマドキを感じてもらおう工夫をしています。

体験教室は県内の小学4～6年生の親子を対象とした夏休み企画で、「刀鍛冶の体験をしよう」の指導を行いました。指導案の作成や実践を通じて体験内容の理解を深め、さらに子供達に楽しく学んでもらうための声掛けや、注意等についても学びました。



指導は四人一組となり説明する人、実演する人など分担して行いました。実習生たちからは、「説明が台本どおりできなかった」「声が大きく出せなかった」「うまく声掛けができなかった」などの声がかれましたが、体験者の方々には概ね好評でした。

刀鍛冶体験は火を使用するため、屋外で行われます。屋根がついている場所とはいえ気温が非常に高い中、実習生たちは汗だくになりながら指導や声掛けを行っていました。



秋の特別展「とやま歴史万博」で使用する展示学習教材は、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中近世の6つの時代をイメージさせるパネル用のイラスト作成です。

実習生たちは、それぞれの時代につ



いて調べ、一般的な時代の特徴だけでなく、富山ではその時期どうだったのかも考えながら、作成していました。大きくプリントアウトされたイラストには、ワンポイントとなる立体的な造形もされています。特別展は10月10日(金)から開催(詳細はp7)しますので、是非、実際にご覧ください。

来年度の実習実施要項は、翌年1月にホームページ上で公開する予定です。
(青山 裕子)



古写真発掘!—《26》



いのくち 井口遺跡 (1)

昭和53年 (1978年) 撮影

南砺市井口

井口遺跡は、南砺市井口 (旧井口村) の山田川の河岸段丘尖端にあり、標高は97~110mです。

昭和37 (1962) 年のほ場区画整理の際に発見され、見つかった縄文土器は、当時の研究者により「井口式」とされ、井口遺跡は、縄文時代後期の「井口式」の標式遺跡として知られるようになりました。

昭和50年代になり県営一般農道整備とほ場整備が計画され、昭和53 (1978) 年に試掘調査、昭和54 (1979) 年に本調査が実施されました。

上の写真は、昭和53年の試掘調査の様子です。当時は、人力で1㎡の試掘坑を掘って遺跡の確認をしていました。下の写真は、「第2土器だまり」とされる箇所調査の様子です。発砲スチロールの箱に大量の土器が入っています。

出土した多くの縄文土器は貴重な資料となり、イノシシの形をした注口土器は、たくさんの本に掲載されています。



井口遺跡 (南から)
赤矢印が調査箇所



イノシシ形注口土器

編集後記

今年も博物館実習の大学生たちが来ました。自分のこどもと同じ年の彼らを見てると、調べものは本を見るより先にスマホで調べたり、イラストを生成AIで作ったりと時代の流れを感じます。遡って私が学生時代、卒論はワープロ書きのものと手書きのものが半数ずつだったそうです。恩師にワープロで書かれたものは出版物のようで卒論の気がしないから、手書きのものと交互に読むと言われたことを思い出しました。(担当 青山)

富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」VOL.172

令和7年9月30日発行 編集/富山県埋蔵文化財センター 〒930-0115 富山市茶屋町206-3 TEL076-434-2814
URL <https://www.pref.toyama.jp/3041/miryokukankou/bunka/bunkazai/maibun/index.html>

